

Title	戦後の韓国長老会派教会と日本基督教団の交流の事情 : 一九六七年宣教協約に至るまでの日韓教会交流(関係)の歴史研究(第一回)
Author(s)	高, 萬松
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.51, 2012.1 : 85-110
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4212
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

戦後の韓国長老派教会と日本基督教団の交流の事情

——一九六七年宣教協約に至るまでの

日韓教会交流(関係)の歴史研究(第一回)

高 萬 松

はじめに

二〇一〇年は、一九一〇年に日韓併合調印がなされた二〇〇周年の年である。意味のあるその年に韓国の長老会神学大学校と日本の聖学院大学が「日韓関係一〇〇年(一九一〇—二〇一〇)」と日韓キリスト教会の交流に関する日韓共同研究⁽¹⁾(以下、「日韓教会交流「関係」史研究」と略す)というテーマで共同研究をはじめた。共同研究の目的は以下のものである。すなわち、「日韓のキリスト教史を、一九一〇年を起点に、日韓関係の未来に向けて前向きに捉えなおす」ことである。この研究により「北朝鮮、中国を視野に入れ、北東アジアのキリスト教会のこれからの交流と協力の基盤を築く」⁽²⁾ことである。本研究は、この二〇〇年を、第一期「三・一運動と日韓キリスト教会」、第二期「三・一運動以降の日韓キリスト教会」、第三期「一九四五年前後日韓キリスト教会とそれ以降の日韓関係」の三期に区分している。本稿は、この第三期を対象としている。

またキリスト教史といつてもカトリック、あるいはプロテスタント教会でもキリスト教協議会など超教派の全体的交流を対象とするのではなく、日本基督教団と韓国の長老派教会との関わりに焦点を当てる。⁽³⁾ この研究は、今後、ルーテル、聖公会、メソジスト、バプテスト派などへと拡がっていくことが予想される。本稿は以上の共同研究の成果の一部である。

問題設定と資料

「日韓併合」以来三六六年間、日本は朝鮮人の政治的支配と経済的収奪だけではなく、文化的教化活動をも強行した。当時、朝鮮ではキリスト教は少数であったが、知識人や民衆に深い影響を及ぼしていた。そこで日本政府は、土肥昭夫の言うように日本のキリスト教が朝鮮のキリスト教会に働きかけ、統治に民間レベルで貢献することを期待していた。⁽⁴⁾ その意味で、日本の韓国併合に日本のキリスト教会は大きな役割を果たした。それでは、戦後、日本のキリスト教会は戦前のあり方を謝罪し、韓国のキリスト教会とどのように和解し関係を築いたのか。

本研究は戦後における日韓教会の関わりの中の最初の段階を対象にする。まず、日本プロテスタント最大の日本基督教団と韓国プロテスタントの長老派教会の関わりであり、特に一九六七年に注目する。一九六七年に、日本基督教団が「韓国三教会」⁽⁵⁾と「宣教協約」を結び、一九四五年八月一五日の「解放」あるいは「敗戦」⁽⁶⁾以後、約二〇年を経て日韓教会交流が文書上で胎動しはじめたのである。

「宣教協約」が結ばれるまで、どうして二〇年以上の期間が必要であったのか。本稿ではその答えを探ってみる。前述の「韓国三教会」には二つの長老派教団と一つのメソジスト教団が含まれているが、本稿での対象は前者のみ、つま

り、大韓イエス教長老会（統合派、詳細については後述する）と韓国基督教長老会に絞られている。その二つの長老派教団はそれぞれ歴史的背景と神学的特性が異なっている。本稿は韓国長老派教団の分裂過程を辿って、日本基督教団と関わっている韓国長老派教団の神学的特徴と、また二つの長老教団が「宣教協約」にどのような姿勢で臨んでいたのかを究明してみたい。

本稿で参照した資料は以下のとおりである。第一は『教団新報』である。本誌は「教団の公報⁽⁷⁾として、教団の主張、重点施策、活動などをPRする」と述べられている。前身は植村正久の創刊になる『福音新報』であり、名称等変更はあるが、公報としての性格は引き継いでいる。⁽⁸⁾一九六九年から判型をタブロイドに、頁数を四頁に変更した。⁽⁹⁾『教団新報』の編集方針は時代毎に変わっているので、ここでは一九六七年前後に絞って見よう。その編集委員会によれば編集方針は「ニュース性よりも解説記事に重点をおき、教団の現状と問題点をあやまりなく伝えるとともに、教区や教会と対話をかわしてゆく」ということである。⁽¹⁰⁾言い換えれば「教団の方向に対する正確な認識⁽¹¹⁾」を伝えるということである。そして、一九六五（昭和四〇）年一月に紙名を『基督教新報』から『教団新報』へと改題した。⁽¹²⁾発行部数を見ると、一九六四年四月から全教会、伝道所に一部ずつ無料配布を実施し、一九六六年現在四〇〇〇部を発行している。⁽¹⁴⁾近年、一九四一年号から二〇〇七年発行までのものがDVDに収められた。⁽¹⁵⁾本稿ではそれを主として用いている。

第二は『韓国基督教公報』である。これは一九四六年に創刊されたもので、「解放」以後、最初の週刊新聞であった。⁽¹⁶⁾一九五四年四月に大韓イエス教長老会の総会「日本で言えば、大会」⁽¹⁷⁾で教団機関紙として深めることが決定されている。⁽¹⁸⁾一九八八年からは縮刷版が発行されており、二〇〇一年にはA4サイズの約三〇〇〇頁分量の『韓国基督教公報索引事典』が発行された。その序文にその新聞が、半世紀の歩みを通して長老派教団だけではなく、韓国教会を代弁する新聞として歩んで来たと述べられているように、韓国教会史研究において重要な史料である。⁽¹⁹⁾

第三は『大韓基督教長老会会報』である。これは、一九五七年七月に創刊された韓国基督教長老会（以下、場合によつ

て「大韓基督教長老公会」と混用する)の機関紙(月刊)である。創刊号にはその使命を「簡単な説教と論文を掲載しつつ、主に総会と老会と各個教会のニュース、そして総会の傘下にあるすべての団体機関のニュースと対外教界ニュースを伝えること」にしている。⁽²⁰⁾これは韓国基督教長老公会のウェブ・サイトで検索可能なものでそれを用いている。⁽²¹⁾

第四は、『日本基督教団総会報告書』である。この資料は市販されていないので、日本基督教団宣教研究所所蔵のものを参照している。⁽²²⁾

第五は、『大韓イエス教長老公会総会会議録』である。一九〇八年から一九八六年までの会議録が全一九巻で取められているので、本稿ではそれを用いる。⁽²³⁾

第六は、『韓国基督教長老公会総会会議録』である。これも前述の『大韓基督教長老公会会報』と同じように、ウェブ・サイトで検索可能である。⁽²⁴⁾

第七は、『福音と世界』(新教出版社)である。一九五二年に創刊された。森岡巖は、一九八〇年代に寄稿した文章で本誌が「日本基督教団を中心とする教会の形成と革新の課題を追求し、世界教会的・アジア的視野」⁽²⁵⁾を持っていると言いが、現状とは異なっているであろう。しかし一九六〇年代半ば出版のものには、日韓関係についての資料が多数あるので、それらを有効に用いる。例えば後述の呉允台牧師が書いたものがあげられる。⁽²⁶⁾

本論文と関連のある先行研究は以下のものがある。一九六〇年代に、日韓の教会の交流に携わっていた呉允台の『日韓キリスト教交流史』⁽²⁷⁾がある。一九六八年の出版物であるが、前述の「宣教協約」締結当時の状況が詳しく述べられている。⁽²⁸⁾一九七二年に来日し九三年の帰国まで日韓の関係に影響を与えている池明観の著書『日韓関係史研究』⁽²⁹⁾がある。それは論文集で、その中の「韓国のマスコミを通して見た日韓関係史」という論文は「解放」以降の時代区分を試みている。⁽²⁹⁾キリスト教については、あまり多くは論じられていないが、一九六五年以降の日韓交流に関わる内容で、啓発される近年のものとして、徐正敏の『日韓キリスト教関係史研究』⁽³⁰⁾がある。この本は戦前における日韓教会の歴史が中心

となつてゐる。一九六七年に注目し、また、長老派教会との交流に視点を置いている本稿との直接的関連は薄い。

1 日本基督教団と「韓国三教会」との宣教協約

(1) 協約の内容

一九六七年に「日本基督教団」は『日本基督教団総会報告書』の言う「韓国三教会」と協約を結んだ。一九四五年八月一五日以降、二一年を経てようやく協約を結ぶようになった。まず、その協約の内容を見よう。

協約の序文のような箇所では、協約の主体が「日本基督教団と大韓イエス教長老会、基督教大韓監理会、韓国基督教長老会」となつてゐる。つづいて、協約の内容は「両国における過去の傷つた歴史をふりかえりつつ、ここに和解の福音に立つて新しく主にある友好親善の深い交わりを願ひ、相互に宣教活動のため」⁽³¹⁾協約を取り交わすものと記されてゐる。そして協約事項が四つ挙げられてゐる。第一は宣教のための積極的努力と協力をするために人事交流をする。第二に相互の連絡は委員(会)を通して行ふ。第三は相互が出来る限り宣教に関する資料を交換する。第四は相互が広くエキシメニカルな視野に立つて協力を推進する、という内容である。⁽³²⁾

(2) 「韓国三教会」とは

既述の「韓国三教会」という表現は適切であろうか。そのままの表現では、韓国にある三つの単立教会のように聞こ

えるかも知れないので、われわれは後述のように「韓国三教団」と表現したい。韓国側での「宣教協約」の主体が「教団」であったということを究明するために、また、当時の『教団新報』には高い頻度で韓国の長老派教団の名前が登場することから、正しい理解を深めるためにも、われわれは韓国における教派分裂の経緯を見なければならぬ。

戦前に韓国で長老派教会と言えば、一九二二年九月二日に第一回総会「大会」から始まった「イエス教長老会朝鮮総会」しか存在していなかった。⁽³³⁾（一九四九年四月二日、それが「大韓イエス教長老会」という名称に変わったので、本稿では戦前、戦後の区分なしに、「大韓イエス教長老会」と混用する）。分裂の連続で一九五〇年代になると、韓国の長老派教団は少なくとも四つになる。

第一は、大韓イエス教長老会（「高麗派」、あるいは「高神派」と呼ばれている）である。一九四五年八月一日「解放」の後、神社参拝を拒否し収監されていた人々が出監されると、彼らは一九四六年に「高麗神学校」を設立した。大韓イエス教長老会総会が一九五一年五月二四日にその神学校を「正式に断罪」⁽³⁵⁾したので、一九五二年九月一日にその神学校を中心とした「高神派」が分派された。分裂の主な原因は「神社参拝をした牧師たちの無反省及び「彼らの」教権の継続的掌握に対する「神社参拝拒否者たちからの」反発」⁽³⁶⁾があげられる。一九五六年の教団の会議での構成メンバーは、教会数が五六八、信徒数が一万五三五〇名、牧師数が一一一名であったので、当時として大きな規模ではなかった。教派的性格は神社参拝を拒否したという伝統を掲げており、他の長老派教団より排他的である。「宣教協約」の「韓国三教会」からは除外されている。

第二は、「韓国基督教長老会」の分裂である（分裂当初は「大韓基督教長老会」であったが、後に「韓国基督教長老会」に変更された。別称で「基長派」とも呼ばれている）。その前身は戦前に建てられた「朝鮮神学校」にさかのぼる。韓国で長老派教会の神学校として初めて一九〇一年に設立された平壤の長老会神学校は一九三八年五月に、日本帝国主義による神社参拝の強要を拒否するために休校に入った。しかし、同年「一九三八年」九月には、朝鮮イエス教長老会

総会が神社参拝の決行を決議したため、平壤長老会神学校が閉校されると、当時の「進歩的な自由主義的神学の陣営」⁽³⁸⁾の人々は、一九三九年に「朝鮮神学校」を設立した。中心人物は青山学院神学部出身の金在俊であるが、大韓イエス長老会総会から次のように罷免された。「金在俊氏は第三六回総会決議に違反する聖書誤謬説を主張したため、懲戒条例第六章四二条によって、イエスの名とその職権で牧師職を罷免し、またその職に関する行為を禁ずる」⁽³⁹⁾。

一九五四年六月一〇日に、金在俊を中心として「福音の自由、神学研究の自由を掲げて」、⁽⁴⁰⁾「大韓基督教長老会」という教派に分裂した。そこに、当時「自由主義的神学」⁽⁴¹⁾的傾向にあったカナダ宣教部が合流したことは大韓基督教長老会の性格をよく表しているであろう。一九七〇年代の韓国の民主化闘争にはこの教団が積極的に関わった。⁽⁴²⁾当時の所属教会数が五六八、牧師が二九一名、信徒が二万一九一七名であったので、⁽⁴³⁾この教団も規模面では小さいが、日本基督教団と「宣教協約」を結んだ。

続いて、WCC加盟の問題で分裂が起きた。一九五九年のことである。これが韓国の長老派教会の三番目の分裂となった。加盟を巡る賛成派と反対派の対立の結果、賛成派が大韓イエス教長老会「統合派」となり、反対派が「合同派」となった。分裂当時、中心勢力を見ると、統合派は「すべての宣教部の宣教師たちと彼らの経営している機関、学校、病院などと関連のある韓国人牧師、長老、そして国際関係にあるすべての人々」⁽⁴⁴⁾が中心となっており、一方、合同派は「朴亨龍による保守神学と信仰をそのまま守ろうとする人々」⁽⁴⁵⁾が中心となつて教団が形成された。現在も分裂当時と変わらず神学的には、「合同派」が「統合派」より保守的である。「宣教協約」を結んだのは統合派だけであつたのである。当時『教団新報』の記事の中で「大韓イエス教長老会」とあるのは「統合派」であつたということに、注意しなければならぬ。

「韓国三教会」との関連で神学的傾向を言えば、韓国基督教長老会の韓国神学大学は進歩的で自由主義的であり、統合派の長老会神学大学の神学的路線は「中道」⁽⁴⁶⁾と見てよいであろう（以下、本稿で「大韓イエス教長老会」とは「統

合派」を意味する)。

以上のように、『日本基督教団総会報告書』の言う「韓国三教会」という表現は曖昧である。それは、三つの「教派的組織となり、各々が「教団」として独立している。それゆえ、その言い方は「韓国三教団」と呼ぶべきであろう。

2 「宣教協約」を結ぶ前後の日韓教会の動き

(1) 大村勇議長が韓国基督教長老会総会に参席(一九六五年九月)

一九六五年六月二二日に日韓基本条約が調印された。九月には日本基督教団総会議長が初めて韓国教会を訪問した。ここにはどのような事実があったのか。

韓国教会との交流を巡って日本基督教団は「一九六五年九月二五日〜三〇日開催された韓国基督教長老会第五〇回総会に、大村議長を教団代表として派遣した」⁽⁴⁶⁾。大村は訪韓後に『教団新報』が載せたインタビューの中で、今後の日韓教会の関係について次のように述べている。すなわち、韓国の教会は「長い歴史を貫いて、民族の苦難の中で、民族の精神的バックボーン」となっているということであり、韓国の教会が求めているのは、「儀礼的謝罪ではなく、日本の教会の今後の姿勢」が重要であるということである⁽⁴⁷⁾。

韓国基督教長老会の第五〇回の総会において大村議長は祝辞を述べたが、ここではその一部を紹介することに留めた。次のような内容は過去の歴史に対する謝罪である。

この機会に、わたくしはまず最初に、長く重苦しくわたくしの心を圧しておりました事柄につき、素直に申し述べたいと存じます。太平洋戦争終結以前、三十六年にわたり、日本統治下にあった貴国の皆さまに対し、日本政府および日本国民が犯しました数数の政治的な、また人権上の罪悪につき、日本の教会として深く悔い改めるとともに、心から謝罪いたしたいのであります。…(中略)…従来、日本基督教団は貴教会と必ずしも十分なる連帯をとっていませんでしたが、この点についても十分に反省いたし、今後はこれを機会に相互の理解と交わりを深め、密接なる教会的連絡のもとに、主キリストよりゆだねられた共同の責任を果たしたいと願う次第であります。…一九六五年九月二五日日本基督教団総会議長 大村勇⁽⁴⁸⁾

興味深いのは大村議長の訪韓についての韓国の教団の反応である。韓国の二つの長老教団の中で、韓国基督教長老会の資料には簡単ではあるが言及されている。

韓国基督教長老会の機関紙『韓国基督教長老会会報』には「今回の総会では、…日本基督教団の「総会」議長大村勇博士及びわれわれの同胞の教会である在日大韓基督教会の総会長丁仁寿牧師らがわれわれの総会を訪問し共に礼拝を捧げ祝辞を述べ、我が教団との関係を更に深くすることを約束した。…特に日本基督教団では韓国教会に送るメッセージ「前記引用箇所の大村議長の祝辞のこと」を送ってくれた。日本基督教団常任委員会の決議を終えたこのメッセージにおいて、彼らは三六年間にわたって日本が韓国に対して犯した全ての罪過について、日本の国民を代表して謝罪していると述べ、和解の道を開いた⁽⁴⁹⁾、と述べられている。また同箇所で、大村議長らが祝辞を述べたことについて、「これで世界教会が一つの教会であり、その中の全ての信徒が一つの体となる兄弟であったことを示している」と高く評価されている。両者の間には「和解」への扉が開いていると言えるであろう。

しかし、大韓イエス教長老会は、呉允台によれば大村牧師の来訪を断わったのである⁽⁵⁰⁾。なぜであろうか。その理由は

おそらく、丁度二か月前（六五年六月）に日韓基本条約批准反対集会がその教団指導者・韓景職牧師を中心として行われ、日本に対する感情がよくなかったからだと考えられる。ここに日本基督教団に対する韓国の両教団の見方の違いがあらわれているのではなからうか。

(2) 宣教協約と鈴木正久議長の訪韓について

一九六七年七月二六日〜八月一日、韓国の三つの教団の代表が来日し、「韓国三教会と教団との協約」を起草した。⁵¹その後一九六七年九月二〇日〜二四日に鈴木正久議長と木村知己書記が韓国の三教団を訪問した、と『第一五回日本基督教団総会報告書』に記されている。⁵²

そこで鈴木議長による韓国三教団の訪問記を見よう。一九六七年の十一月一八日付の『教団新報』には「現地の反響をみる——韓国三教会訪問」という題の記事がある（ここで、当時延世大学の所在地を「平壤」と紹介しているのは大間違いで、韓国に対する認識のズレが見られる）。

鈴木議長の訪韓に関する記事は次のように記されている。訪韓の最初の日（九月二〇日）、ソウルのアヒョン・メソジスト教会で挨拶をした。そこでは、「あの暗い戦時中、韓国の人々に対して日本の教会が、キリストの教会として正しい態度をとらなかつたことに対して、鈴木先生は、教団議長として、神の前で韓国の人たちにまずわびてから、救いの喜び、復活の望み、主にある兄弟姉妹の交わりの喜びを、力強く語られた」と報告され、メソジスト教会の代表者の一人が、「深い感銘を受けた。このような恵まれた集まりが、もつと早くあるべきだった」と語ったと記されている。⁵³

この時鈴木議長は韓国の二つの長老教団でも講演などを行ったが、韓国の両教団の会議録には何も言及がないので、『教団新報』から韓国基督教長老会の議長の話を用しよう。⁵⁴当時の総会議長であった姜元竜牧師は、「今度、日基

団議長に講演を依頼したのは、韓国教会が、世界教会の中で、特にアジア教会の中で考え動いてゆかねばならないことを、切実に感じているからだ。韓国教会の将来を考える一つのポイントは、日本との関係である。それゆえに、謝罪、謝罪と言っても、何の具体的、建設的な実りのないことばを聞くよりも、さらに一歩進んで、具体的に日本教会の動きを知りたいので、純粋な意味での講演を願った⁽⁵⁵⁾。

鈴木議長の訪韓について、韓国の長老教団の反応はどうであったのか。韓国基督教長老会の見方は上記の姜元竜の言葉に表れているように、より具体的に日本の教会の動きを知りたいという積極的姿勢が見られる。しかし、大韓イエス教長老会での反応は鈴木議長の訪韓について資料には記録がなく「冷淡」と言っつよい。二〇〇三年にその教団の創立九〇周年記念で出版された『大韓イエス教長老教会史』は、鈴木牧師の挨拶に対する当時総会議長金允植牧師の答辞を「過去の恐しい歴史を繰り返さないために、韓日両国の教会は交わりを深めて新しい歴史のために協力すべきでしょう」と語ったこととして紹介しているが、この答辞は出典不詳で、資料として確認できない⁽⁵⁶⁾。澤正彦が『教団新報』の記事で次のように言っていることから、当時鈴木議長の講演に心を閉ざしていた人があったことであろう。すなわち、「植民地時代に、警察からの迫害を経験した牧師・長老たちは鈴木議長の講演に耳を傾けなかった」⁽⁵⁷⁾。

(3) なぜ、二〇年以上の時間がかかったのか

ここで、なぜ二〇年もかかってしまったのかを、①韓国の国内情勢、②反日感情、③日韓条約批准反対運動の三つの点から考察する。

① 韓国の国内情勢

一九四五年八月一日に日本の植民値支配から「解放」され、一九四八年に「大韓民国」政府が樹立された。しかし、一九五〇年四月に韓国の長老派教会の内部で大きな紛争が起き、遂に六月には「朝鮮戦争」が勃発した。「釜山まで下って行った韓国長老教会は、一九五一年五月二四日、開かれた總會（第三六回の継続）において、高麗神学校派を正式に断罪」⁽⁵⁸⁾する程、戦争の最中であつても教会は内部紛争中であつた。その戦争を体験した神学者韓哲河が「六・二五動乱「朝鮮戦争」中に、韓国教会は、次のような点で、羞恥にみちた歴史を記録したと結論を下さざるをえないであろう。六・二五を経た韓国教会の姿は、民族と共に受難してゆく姿というよりも、救助の浪に乗つて、受難を避け、動きまわつた姿であつた」⁽⁵⁹⁾と述べているように、韓国教会は自己保存しか考える余地がなかつた。避難を余儀なくされてきた教会、一九五三年の「休戦」の後にも韓国教会は自己中心に落ちて、前向きの姿勢で日本の教会と関係回復を結ぶ余裕がなかつた。また、一九六〇年にあつた二つの革命、六〇年の「四・一九学生革命」、六一年の「五・一六軍事革命」の時には、韓国教会は自己保存に力が奪われて、日本の教会と交流を試みる余裕がなかつたであらう。

② 反日感情

韓国において民主化闘争の時代、韓国から来日し日韓関係に影響を及ぼした池明観は韓国の日刊紙『東亜日報』を資料とし、一九四五年から約五〇年間の日韓の關係史を時代区分している。すなわち、一九四五年から一九五〇年までを戦後史における「反日の原点」と設定し、一九五〇年から一九六一年までを「日韓国交再開への歩み」、一九六一年から一九六五年までを「日韓条約の成立と反対の戦い」の時期と分けている。⁽⁶⁰⁾一言で言えば「解放」以降、一九六五年までの日韓関係の中に流れているのは「反日感情」ではないかと思われる。

われわれは、反日の原点を一九四五年八月一日以降の神社の放火事件と見る。反日の行動は、日本人の手によって建てられた神社を燃やしたことから始まった。森田芳夫によれば、一九四五年に韓国の全国各地にあった神社の総数は二三四六であつて、一九四二年の参拝者数が二六四万八三六五名、一日平均の参拝者数が七千名を越えていたが、一九四五年八月一日の夜、平壤神社が放火されたことをはじめとし、相次いで各地の神社が破壊・放火された。⁽⁶¹⁾森田の、神社参拝は「朝鮮人にとっては民族弾圧と考えられ、その不満が神社や奉安殿に向けられた」という指摘は正しい。神社への放火は戦後、反日運動の原点であつた。

ここで当時の教会やキリスト者は何をしたのかという疑問が生じる。一九四四年四月二日に朱基徹牧師が平壤刑務所で殉教したように、神社参拝問題を巡つては「平壤」に注目すべきであろう。「解放」後、八月一七日には神社参拝問題で投獄された約二十人の牧師・長老らが平壤刑務所から釈放された。⁽⁶²⁾しかし、八月二七日になると、「ソ連軍の大部隊が平壤に進駐」⁽⁶⁴⁾するようになって、教会は新しい局面に置かれていたのである。

③日韓条約批准反対運動

一九六五年六月に日韓条約が調印されると、当初日韓正常化については賛成していた韓国の教会は、調印された日韓条約が抗日闘争した先達の精神的遺産を蹂躪するものと見、条約批准反対に転じた。⁽⁶⁵⁾日韓条約の批准反対運動は大韓イエス教長老会で影響力のある韓景職牧師が主導となつて展開された。日本に対する彼の見方は次のような説教において表れている。一九六五年六月二七日の説教の一部を引用しよう。韓景職は言う。

今年は一九六五年です。私たちは六〇年前の日韓保護条約の苦しい記憶を今でも持っています。ちよつと前に日韓条約が締結されました。国民の間には少なくない不安と恐怖心を抱いている姿が見られます。恐らく

日韓国交正常化について、その正常化の意味自体は殆ど了解していると思われる。しかし、今回の条約が締結されたことについて、国民の多数が憤慨していると思います。それはまず、日本の姿勢から来たと思います。日本は過去三六年間にわたって我が民族と国家に対して言い切れない罪を犯しましたが、今日に至るまで懺悔と謝罪の姿勢を見ることができません⁽⁶⁶⁾。

大韓イエス教長老会の機関紙『韓国基督公報』の一九六五年七月と八月の紙面は日韓条約批准反対運動に関する記事で満ちている。当時、永楽教会で「国家のための祈祷会」が開かれていたが、参加人数を見ると規模が大きい。一九六五年七月五日と六日に約五千人が集まって、「国民よ、覚醒しよう！ 批准反対！」というリボンを張って抗議デモに参加したと伝えられている。七月一日の第二回目の祈祷会には七千人あまりが参加した。その中で説教者は、「過去に失われた主権が再び奪われる危機に瀕した我々は奮発して立ち上がらなければならない」と語った⁽⁶⁷⁾。また、二千五百人あまりが参加した八月一日の集会で「日本のキリスト者」へ送るメッセージが採択された⁽⁶⁸⁾。

ここで注意しておかなければならないことは、韓国キリスト者の反日感情が日本のキリスト者に対してではないという点である。反日というのは、日本の「新植民政策」に対してであって、むしろ彼らは日韓の民衆、キリスト者の間で関係改善を願っているのがそのメッセージからうかがえるのである。その冒頭では、日韓の両国が近くて遠い関係にあるのは、韓国人の歴史運営に過ちもあるが、日本の伝統的な対韓侵略政策に主要原因があると指摘している。そして「日韓併合によって政治、経済、文化に至るまで半世紀間の侵略が韓国人の心理に植え付けた「怨恨」は「日本の」キリスト者たちが想像できないほど深刻なことである。このまま日韓条約の批准が強行されると、両国民の間に親善よりはむしろ葛藤と敵意が激化される恐れがあると指摘し、批准反対の理由がそこにある」と、「日韓の間、誠の交わりのための精神的・倫理的な基盤を作るために」、また昔からの「怨恨」を一掃するために、日韓の交流の必要性があり、

「日本に「私たち」と同じ信仰を持つ皆さまも私たちの苦しみを諒解し、貴国内での対韓の姿勢がさらに良い方向に転換されることに協力してください。私たちに大きな激励になると思われます」と締めくくられている。⁽⁶⁹⁾

ところで、この祈祷会に前記の『基督公報』によれば、韓国基督教長老会の金在俊牧師も参加している。これは、日韓条約批准反対運動が教派を越えているということであろう。このような反日の雰囲気の流れる中で、二年後に日本基督教団と韓国の長老派教会が宣教協約を結んだのである。それゆえこの経緯から考えられることは、韓国のキリスト者たちの本心に「主においてひとつの肢体」⁽⁷⁰⁾としての日本の教会と「和解」を願っていたと理解できるといえる。

3 日本基督教団に対する韓国の二教団の見方

それでは、韓国の二つの教団は日本基督教団との交流についてどう見ていたのか。①大韓イエス教長老会、②韓国基督教長老会に分けて考察する。

(1) 大韓イエス教長老会

結論から言えば、大韓イエス教長老会は日本基督教団との交流に対して「消極的」であったと言えよう。ここには次のようなことがあった。

① 日本基督教団の神社参拝問題への態度に対する批判

戦前、日本基督教会は神社参拝問題で朝鮮の長老派教会に「まずきをもちたし」ことがあった。日本帝国主義によって神社参拝が強いられていて朝鮮の長老教会が困窮に置かれていた時に、当時の日本基督教会は神社参拝が宗教でないということ説得するために富田満牧師を朝鮮に派遣した。彼の行動が次のように記されている。

本年「昭和一三年」六月より七月にかけて日本基督教会大会議長の資格を以て芝教会牧師、富田満氏が朝鮮の伝道旅行を行った七月一日平壤に於て西鮮四道「朝鮮半島の西側、平安南道、平安北道、を指すであるう」の長老教会信徒の代表者百数十名と一堂に会し神社問題を討議した午後八時より翌朝午前四時迄徹宵熱心真剣の態度を以て研究討論し遂に神社参拝を承認するの決議を行った。⁽⁷¹⁾

一九四二年に「日本基督教団」が創立されたが、一九四三年五月には韓国での最初の長老派教会であり現在の大韓イエス教長老会所属の「セムナン教会」⁽⁷²⁾で「日本基督教朝鮮長老教会」が発足した。そこから長老派教会の親日協力の総括として「日本基督教朝鮮長老教会実践要目」が全国の教会に配布されたのである。⁽⁷³⁾それは大韓イエス教長老会にとつて日本のキリスト教に対する忌わしい記憶である。一九四四年になると、日本基督教団は「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」⁽⁷⁴⁾を送った。そして一九四五年七月一九日、「解放」の一ヶ月前には、韓国に残存していた諸教派が、朝鮮総督府の指示によって、「日本基督教朝鮮教団」として完全に統合されたのである。⁽⁷⁵⁾神社参拝の記憶を含めてこれらの記憶が日本帝国主義の強制によるものにしても、韓国のキリスト者、とりわけ、大韓イエス教長老会は日本基督教団に対して「怨恨」を抱いていたと考えられる。

何よりも、強制されたにせよ神社に参拝したことに彼らは自ら恥を感じていた。一九五四年に開かれた第三九回大韓イエス教長老会総会において、彼らは一九三八年の総会で決議した神社参拝の決行に対する「取り消し声明」を発表したのである。李源永が大韓イエス教長老会総会議長に選ばれたのは、一九五四年の第三九回の総会であった。彼は日本帝国主義の時代に、神社参拝を拒否したという理由で、三回にわたって収監され、あらゆる拷問によって死ぬ状態まで至ったが、「解放」の時に釈放された。その彼が、総会議長に選ばれると、総会は神社参拝を積極的に勧めた以前の総会（一九三八年九月）での決議を取り消す声明を発表したのである。声明書要旨は、日本帝国主義からの強圧によって神社参拝が決議されたということ。その決議が神の戒めを犯していたので、今回の総会において取り消すという内容であった。⁽⁷⁶⁾ それに関して『韓国基督公報』は今回の総会が「神社参拝の拒否によって教会から除名された信徒と牧会者に復権される道が開かれ、神社参拝の問題によってお互いに信頼しなかつた人々が和解し、第三三回総会以来、分裂と争いの繰り返しであった総会が今回の総会で解消され、終わりを告げた」と評価しているのである。⁽⁷⁷⁾

② 日本基督教改革派教会との交流計画について

日本基督教団総会議長の太村牧師と鈴木牧師が訪韓した年の大韓イエス教長老会（統合）の会議録を見ると、日本基督教団に関する内容は皆無である。協約の締結の後にも沈黙していたのである。⁽⁷⁸⁾ なぜか。その総会の会議録を見ると、実はその教団が日本の他の教団と交流を結ぼうとした痕跡が残っているのである。

一九六六年以降の大韓イエス教長老会総会議録には、この教団が日本基督教改革派教会と交流しようとする動きが見られる。すなわち、「日本基督教恩寵教会の常葉隆興牧師、神戸市神戸改革派神学校の岡田稔両牧師と手紙の交換中である。常葉隆興牧師は、個人的に賛成であるが総会の決定認済が必要であると言ひ、岡田稔牧師は個人的にカルヴァン主義の人々と協力したいと言つた」⁽⁷⁹⁾と記されている。

一九六七年の総会会議録には「日本の神戸で一〇月中旬に開催される日本改革教会大会に、我が総会が親善使節を派遣することが正しいと考えられるが、時間の関係上、とりあえず親善に関する書類を送ることがよいと思います」と記されている。続いて一九七一年の会議録にも日本改革派教会との友好関係を持つために代表を派遣するよう請願書が出されている。⁽⁸¹⁾

大韓イエス教長老会が連絡しようとしていた日本の教会の牧師は次の二人であった。すなわち、常葉隆興（一九七一一九七七）は、一九一八年に植村正久から受洗、一九二三年に東京神学社を卒業し、牧師となった。一九四六年四月に「森元町（東京恩籠）教会とともに日本基督教団を脱退、日本基督教改革派教会創立に参加、創立大会議長を務めた」⁽⁸²⁾。そしてもう一人、岡田稔は、第二回大会の議長であり、その神学校と関わっている。

敢えて言うならば、一九六〇年代半ば、大韓イエス教長老会の関心は、日本基督教団と関係を回復しようとするにはなかった。それは前述したように神社参拝問題があつたからであろう。むしろ彼らは、日本で同じ神学背景を持つカルヴァン主義の教派に関心を払っていたと言えるであろう。

(2) 韓国基督教長老会

それでは長老派のもう一つの教派、韓国基督教長老会はどうであつたか。結論から言つて、韓国基督教長老会は日本基督教団との交流について積極的であつたと思われる。二つの理由が考えられる。一つは韓国基督教長老会が「世界教会の形成を指向」していたということ、もう一つは、日本基督教団との厚い人脈を持っていたということである。第一に韓国基督教長老会の機関紙の巻頭言は、創立五〇周年に大村勇・日本基督教団総会議長の訪問について「我々は世界教会形成を指向する。……総会が隣国の教会のお祝いを受けるということは形式的意味より、ひとつの世界教会形成の

ために信念と誠意を持って努力する一歩進んだわが総会の姿である」と述べている。交流への積極性を表している言葉であろう。第二に人脈関係について『教団新報』が、当時総会議長であった金在俊を「人」という欄で次のように紹介している。「青山学院神学部を昭和三年に卒業（大村勇議長と同期）」した。そして筆者自身は朝鮮神学校のユン校長の時代に、日本人教授として招聘され、「終戦まで金在俊氏と同僚の交わりをもつ機会が与えられた」と言っている。このことは、人間関係を越えて、韓国基督教長老会と日本基督教団との関係の親密性を表しているであろう。

結び

一九四五年八月一五日の「解放」の後、二一年を経て日本基督教団と韓国⁽⁸³⁾の三つの教団が協約を結ぶようになった。協約を結ぶのに、なぜそのように長い期間がかかったのかについて考察した。韓国⁽⁸⁴⁾の状況で言えば、本稿第二章三節で言及したように朝鮮戦争があり、政治的に不安定な時期であったということ、そして何よりも戦後から続けられて来た反日感情も無視できないであろう。反日感情の頂点は日韓条約批准の反対運動が展開されていた時期である。

そしてわれわれは日本基督教団に対する韓国の二つの長老教団の見方を考察してみた。韓国基督教長老会は大韓イエス長老会より積極的であったということが究明されたであろう。なぜ、大韓イエス長老会の方が消極的であったのか。

われわれは両国教会の関係について敢えて「積極的」あるいは「消極的」という言葉を用いた。大韓イエス長老会が日本基督教団との関係に消極的になった根本的な要因は歴史問題にあったと思われる。すなわち、神社参拝問題が最も大きい。その問題によって殉教者が出ており、迫害だけではなく、教会の分裂をも経験したのである。問題はその加害者が誰であったのかであるが、大韓イエス長老会にとってはそれが日本基督教団と同一視されたであろう。こう

なると、関係回復のためには必ず「和解」という道を通らなければならないが、大韓イエス教長老会と日本基督教団の間には、日本基督教団と韓国基督教長老会の間にあった「和解」が正式になかったのではないかと推察する。つまり、一九六五年の大村牧師の訪問の時、日本基督教団が韓国基督教長老会に送った祝辞の中にあつた「和解のメッセージ」である。⁽⁸⁵⁾

一九四五年八月一五日の「解放」の後、二〇年が過ぎてようやく日韓の両国の教会が宣教協約を結んでいたが、一九六〇年代の交流の積極性はその「和解」の有無によつて左右されたと言えるであろう。

注

- (1) 詳細については以下にある。「日韓教会交流史研究——日韓併合一〇〇年を経た将来へ向けた日韓キリスト教会の協力基盤の形成に向けて」、『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』一九卷五号、聖学院大学総合研究所、二〇〇九年、四〇頁。
- (2) 『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』一九卷五号、四一頁。なお、長老会神学大学校との共同研究の成果を発表する研究会が二〇一一年二月一日、駒込、聖学院本部新館二階で開催された。松本周「日韓教会交流史研究会「報告」、『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』二〇卷五号、聖学院大学総合研究所、二〇一〇年、一二頁。
- (3) ここで日本基督教団をとりあげるのは、日本基督教団が長老派の伝統ある日本基督教会を含む合同教団であるばかりではなく、戦前、日本基督教会が神社参拝が宗教ではないということを説得するために富田満牧師を朝鮮長老教会に派遣したこともあったからである。それは、後述の韓国の長老派教会に大きな躓きになったと言わざるを得ない。
- (4) 土肥昭夫「日本の朝鮮統治とキリスト教」、『日本プロテスタントキリスト教史』新教出版社、二〇〇四年、三〇二頁。

- (5) 日本基督教団『第一五回日本基督教団総会議案・報告書』日本基督教団、一九六八年、三二頁。
- (6) 韓国では、「解放」、あるいは、「光復」と呼ばれている。
- (7) 『第一五回日本基督教団総会議案・報告書』、九八頁。
- (8) 鶴沼裕子によれば『福音新報』は、『福音週報』（一八九〇年〜一九九一年）が発行禁止処分を受けた翌月の一九九一年（明治二四）年三月二六日に、その趣旨を継いで改題再発行されたものである。一九四二年九月二四日には四八巻二四二一号に至ったが、一〇月一五日、日本基督教団の成立に伴い、『基督教世界』、『るうてる』などと統合、二四二二号より『日本基督教新報』と改題。更に四四年六月一日二四九二号より『日本基督教団教団新聞』となった。日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、一九八八年、一二〇三頁。
- (9) 従来は月二回、A4判、八頁であった。『第一七回日本基督教団総会議案報告書（一）』（一九六八年四月―一九七〇年三月）日本基督教団、一九七〇年、二五頁。
- (10) 『第一四回日本基督教団総会議案・報告書』、一九六六年、七三頁。
- (11) 『第一五回日本基督教団総会議案・報告書』、九八頁。
- (12) 「二人（主事一、書記補一）で実務を担当、取材のための記者はおかず、総務局の主事陣が、担当事項をニュース記事として提供するという方針」である。『第一四回日本基督教団総会議案・報告書』、七三頁。
- (13) 同上書。
- (14) 発行部数は以下のとおりである。一九六六年四月現在四〇〇〇部（無料配布二二二九、有料一七二二、その他一五九）。『第一五回日本基督教団総会議案・報告書』、九九頁。
- (15) 日本聖書神学校編『教団新報一九四一〜二〇〇七』日本聖書神学校、二〇〇七年（DVD）。
- (16) 『索引事典一九四六年一月〜一九九九年三月（上）』韓国基督教報社、二〇〇一年、五頁。「색인사전(상)」한국기독교보사」。
- (17) 日本の長老派教会は「大会」、「中会」、「小会」で構成されている。韓国ではそれらが、「総会」、「老会」、「堂会」と呼ばれている。したがって、本稿で「大韓イエス長老会総会」とは「大会」のことを意味する。
- (18) 『索引事典（上）』、一二九四頁。

- (19) 同上書、五頁。
- (20) 『大韓基督教長老老會會報』一九五七年七月号(第一卷第一号)、一頁[「대한기독교장로회회보」]。
- (21) Cf. <http://www.prok.org/ebook/include/mainframe.html> (2011.6.17)。
- (22) 本資料は、(東京・新宿区西早稲田二―三―一八所在) 日本基督教団宣教研究所に保存されている。
- (23) 『大韓イエス教長老老會總會會議錄』韓國教會史文獻研究院、一九九〇年[「대한예수교장로회총회회의록」 한국교회사문헌연구원]。
- (24) Cf. <http://www.prok.org/ebook/include/mainframe.html> (2011.6.17)。
- (25) 『日本キリスト教歴史大事典』、一二〇四頁。
- (26) 吳允台「新しく開かれた日韓教会の交わり」、『福音と世界』一九六七年二月号、新教出版社、七八―八一頁。
- (27) 吳允台『日韓キリスト教交流史』新教出版社、一九六八年。
- (28) 同上書、二七八―二九六頁。
- (29) 池明観『日韓關係史研究―一九六五年体制から二〇〇二年体制へ』新教出版社、一九九九年。
- (30) 徐正敏『日韓キリスト教關係史研究』日本基督教団出版局、二〇〇九年。
- (31) 『第一五回日本基督教団總會議案・報告書』、三一頁。
- (32) 同上書、三一―三二頁。
- (33) 『イエス教長老老會朝鮮總會第一回會「議」錄』耶蘇教書會、大正二年、一頁[「예수교장로회조선총회대일회회록」야소교서회「대정二년」]。
- (34) 大韓イエス教長老老會總會歷史委員會『大韓イエス教長老教會史(下)』韓國長老教出版社、二〇〇三年、四〇一頁[「대한예수교장로회총회역사위원회「대한예수교장로교회사(하)」」, 한국장로교출판사]。
- (35) 閔庚培『韓國キリスト教會史』新教出版社、一九八一年、四二八頁。
- (36) 大韓イエス教長老老會總會歷史委員會、前掲書、八九頁。
- (37) 同上書。
- (38) 韓國の神學者たちは「朝鮮神學校」を自由主義的と見る傾向が強い。閔庚培、前掲書、四〇九頁。柳東植『韓國のキリス

- ト教』東京大学出版部、一九八七年、一二三頁。
- (39) 『大韓イエス長老会總會第三八回會議録』大韓イエス教長老会總會、一九五三年、一三三八頁。「대한예수교장로회총회제三八회회의록」대한예수교장로회총회」。
- (40) 澤正彦「朝鮮」、日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局、一九九一年、一一二頁。
- (41) 大韓イエス教長老会總會歴史委員会、前掲書、一三三頁。
- (42) 澤正彦、前掲書、一一二―一三頁。
- (43) 大韓イエス教長老会總會歴史委員会、前掲書、一三三頁。
- (44) 同上書、一五九頁。
- (45) 任成彬「基督教倫理学者が見た韓国教会の社会的責任」、任成彬編『韓国教会と社会的責任』長老会神学大学校出版部、一九九七年、二六六頁。「임성빈」기독교윤리학자가본한국교회역사회적책임、임성빈역음『한국교회역사회적책임』장로회신학대학출판부」。
- (46) 『第一四回日本基督教団總會議案・報告書』、一八頁。
- (47) 『教団新報』三四六六号、一九六五年一〇月二六日、三頁。
- (48) 『教団新報』三四六五号、一九六五年一〇月二日、三頁。韓国語の全文は以下の箇所を参照されたい。『韓国基督教長老会會報』六〇号、一九六五年二月一日、四頁。
- (49) 『韓国基督教長老会會報』五九号、一九六五年一月一日、一〇頁。次のような表現もある。「キリストの和解の使節として訪れた」同上書、五八号、一九六五年九月一日、五頁。
- (50) 吳允台、前掲「新しく開かれた日韓教会の交わり」、八〇頁。
- (51) 『第一五回日本基督教団總會議案・報告書』、三二頁。
- (52) 同上書。
- (53) 『教団新報』三五一六号、一九六七年一月一八日、六頁。
- (54) 姜元童牧師の挨拶については以下の書を参照されたい。吳允台、前掲『日韓キリスト教交流史』、二九五頁。
- (55) 『教団新報』、前掲書。

- (56) 大韓イエス教長老會總會歷史委員會、前掲書、二〇三頁。
- (57) 『教團新報』前掲書。筆者が内容をわかりやすく直した。
- (58) 関庚培、前掲書、四二八頁。
- (59) 韓哲河「韓国教会の栄光と羞恥」、『福音と世界』一九七〇年八月号、七〇頁。
- (60) 池明観、前掲書、一一一―一八頁。
- (61) 森田芳夫『朝鮮終戦の記録』巖南堂書店、昭和六一年、一〇八―一〇九頁。
- (62) 同上書。
- (63) 崔薫「神社参拝と韓国再建教会の歴史的研究」、金承泰編『韓国基督教と神社参拝問題』韓国基督教歴史研究所、一九九一年、一三九―一四〇頁。「최훈」신사참배와 한국재건교회의 역사적 연구」、김승태연음『한국기독교와 신사참배문제』한국기독교역사연구소」。
- (64) 森田芳夫、前掲書、一〇八頁。
- (65) 『韓国基督公報』(一九六五年七月一七日)、一頁。
- (66) 『韓景職牧師說教全集 八』韓景職牧師記念事業會、二〇〇九年、三六五―三六六頁。「한경직목사설교전집八」、한경직목사기념사업회」。
- (67) 『韓国基督公報』(一九六五年七月一七日)、一頁。
- (68) 同上書、二頁。
- (69) 同上書。
- (70) 同上書。
- (71) 戸村政博編『神社問題とキリスト教』新教出版社、一九七六年、三三三頁。
- (72) 朴容圭「韓国基督教會史②」いのちのことば社、二〇〇六年、七八七頁。「박용규」한국기독교회사②』생명의말씀사」。
- (73) 関庚培『韓国基督教會史』延世大學出版部、二〇〇八年、六三四頁。「민정배」한국기독교회사』연세대학교출판부」。
- (74) 「日本基督教團より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」の内容は以下の文献を参照されたい。日本基督教團宣教研究所教團史料編纂室『日本基督教團史資料集第二篇戦時下の日本基督教團(一九四一―一九四五年)』日本基督教團宣教研究所

所、一九九八年、三一六頁。

(75) 関庚培、前掲『韓国キリスト教会史』、四〇九頁。

(76) 『大韓イエス教長老会総会第三九回会議録』一九五四年、二六三頁。

(77) 『韓国基督公報』(一九五四年五月四日)、一頁。

(78) 但し、「在日同胞教会代表牧師の挨拶を受けることを可決した」という内容しか記載されていない『大韓イエス教長老会総会第五二回会議録』一九六七年、三三頁。

(79) 『大韓イエス教長老会総会第五一回会議録』一九六六年、六一頁。

(80) 『大韓イエス教長老会総会第五二回会議録』一九六七年、三九頁。

(81) 『大韓イエス教長老会総会第五六回会議録』一九七一年、二五頁。

(82) 『日本キリスト教歴史大事典』、九四二頁。第一回創立大会記録によれば、当時の出席メンバーは、教職八名、長老三名、計一名が参席した。『日本基督教改革派教会二十年史』日本基督教改革派教会出版委員会、一九七一年、一五頁。

(83) 『韓国基督教長老会公報』五九号、一九六五年一月一日、二頁。

(84) 『教団新報』(一九六六年四月二日)、三頁。原文には「カナダのコロンビア大学に留学し、同校より神学博士号を受けた」とする。詳細は以下の通り。一九二八年に青山学院神学部卒業。一九二八年九月に米国プリンストン神学校入学。一九二九年九月に米国ウェスタン神学校転入学。一九三二年にウェスタン神学校卒業(STB)。一九三二年にウェスタン神学大学院卒業(STM)。一九五八年にカナダのブリティッシュ・コロンビア州立大学ユニオン大学から名譽神学博士号を受ける。Cf. <http://www.changsong.or.kr/home.htm> (2011.6.17).

(85) 祝辞の内容は『教団新報』三四六五号、一九六五年一〇月二日、三頁を参照されたい。

[謝辞] 日本基督教団資料については教団事務所新名知子氏の協力をいただいた。そして日本語の校正は聖学院大学出版部

山本俊明氏に大変お世話になった。両氏に感謝したい。

本論文は、二〇二一年六月一八日（土）、東京神学大学で開催された日本基督教学会関東支部会での発表に加筆・修正を施したものである。